

＜令和6年度＞

世界から人を惹きつけるグローバル拠点形成推進事業
クリエイティブ経済圏の形成に向けた体制づくり推進業務

事業実施報告書

令和7年3月

株式会社クリエイティブマンプロダクション

<SXSW 会場視察行程概要>

3月9日夜 テキサス州オースティン着
3月10日 SXSW会場視察～現地日本人会との交流会
3月11日 SXSW会場視察およびオースティン市長との面会
3月12日 朝オースティン発

●視察メンバー：

清水直樹（クリエイティブマンプロダクション代表取締役）
安藤竜平（クリエイティブマンプロダクション）
ロブ・ケルソー（クリエイティブマンプロダクション）
栗田秀一（CEIPA専務理事）
久米一郎（関西経済連合会常務理事）
山口哲一（バグコーポレーション）

視察の目的と概要：

SXSW（サウス・バイ・サウスウエスト）2025は、アメリカ・テキサス州オースティンで開催される世界最大級のクリエイティブ・フェスティバルであり、音楽・映画・テクノロジー・スタートアップ・アート・メディアなど、ジャンルを越えた発表・交流・学びの場となっている。

本視察の目的は、本事業における、「文化芸術を核として、エンタメ、ビジネス、ファンディングー一体的な「関西クリエイティブ経済圏」を目指す施策（Creative KANSAI構想）を進めており、米国テキサス州オースティンで開催されているサウス・バイ・サウスウエスト（SXSW）を参考にしながら、日本版モデルの構築を検討」という事業目的において、弊社主催フェスティバル基盤との連携、関西域内における文化芸術の発信双方についてSXSWの構造と思想を体感し、「クリエイティブ関西」の構築に資する要素を抽出・考察することにある。

SXSW 2025 視察レポート

SXSW EXPOブース： Austin Convention Center（以下ACC）のメインフロアにある展示スペース。事前登録したバッジの受け取りをここで行うことも含め、このACCがSXSW参加者の起点となる場所である。

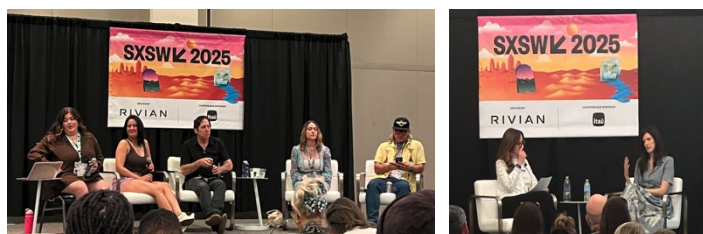
EXPOブースはそのACCの1Fの大ホールに企業ブースや、参加各国ごとにまとまったエリアなどでブースが並ぶほか、スタートアップ企業が小ブースを出展している。アートとの接点を知るという意味で、XR系の展示コーナーも視察。多様な表現が行われていた。

中でも今年6月に初開催となるロンドンでのSXSWのPRブースは今回視察の目的としてSXSWの構造と思想を抽出・考察することに於いては参考例として興味深い内容であった。

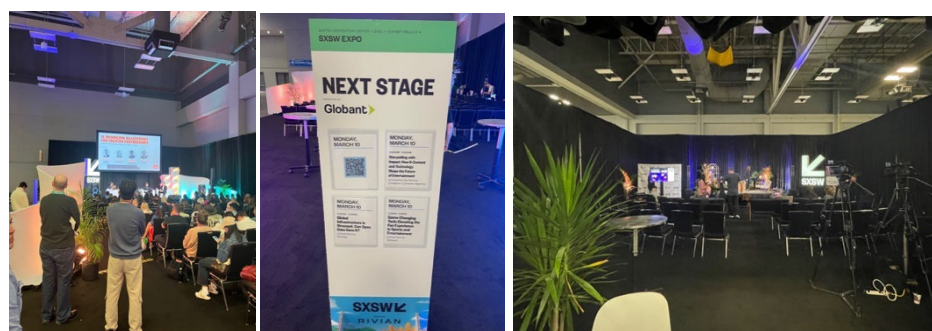


カンファレンス：ACCを中心に、JW MarriottやHilton Austin Downtownといったホテルの宴会場などのスペースといった周辺施設をふんだんに利用し、期間中は数多くのカンファレンスや展示、出展が行われている。

今やこのカンファレンスはSXSWの最大の売りであり、改めてSXSWの現在の本質がカンファレンスによる「勉強会」であることが感じられた。いくつかのテーマで行われた「Artist demo Listening session」で、実績のある音楽家がモデレーターを務め、デモを提出した音楽家に対してアドバイスするコミュニケーションがまだ日本では珍しく興味深かった。



前述のEXPOブースのエリアにも2ヶ所のカンファレンス会場があり、通りがかりでも立ち止まって参加できることで、より身近にカンファレンスごとのテーマを感じることができると感じた。また、モニターには各発言者の言葉がリアルタイムに字幕表示され、難聴者に配慮されていることが些細なことかもしれないが多様性への向き合い方を改めて考えさせられるものだと感じた。



・市内アトラクション、行政ブース、企業ブース：例年のように、英国、カナダ、ドイツ、ブラジル、韓国などが予算をかけて、アーティストやスタートアップのプレゼンテーションとMeetUp(たまり場的な)の場を提供していた。ドバイの高画質シアターが目立っていた。

ジャンルに特化した展示エリアが点在し、XRの台頭が各所で目立っていた。テクノロジーとエンターテインメントの融合や、空間デザインに於ける利用など、スタートアップの出展が多く、音楽やエンタメだけではなく、デザインやアートに至る実用の可能性を感じることができた。



ミュージックショーケース：日本をテーマにした音楽ショーケースは、TOKYO CALLING × INSPIRED BY TOKYO showcase supported by CEIPA at Mohawkと Sounds From Japan at Elysiumでの2つが行われ、盛況であった。SXSWをジャンピングボードにネットワークを広げる試みは、30年前からJapan Niteとして行われてきたが、グローバル化が進む中、日本の音楽界におけるSXSW活用は広がってきていることが実感できた。



また、英国のBritish Music EmbassyによるUK House at Palm Doorは期間中にライブが絶え間なく開催され、ライブで使用するスピーカーや、バーで提供するドリンクも英国ブランドが使用されるなど、まるで英国のパブやライブハウスにいるような雰囲気だった。音楽だけでなくそれに付随する文化的な背景もPRすることでの相乗効果を感じることができ、日本をPRする上で大変参考になるものであった。



その他、Rivian Parkで開催されていたRadio Day Stageのライブではステージ上に手話通訳がおり、アーティストが歌う歌詞や、発される音を手話で表現しており、これには音楽の聴き方に対する多様性という意味で考えさせられるものがあった。



日本REPによるレセプションパーティ：日本REP(未来予報) とオースティン市日本人会によるパーティは大盛況で様々な出会いがある場となっていた。SXSWプレジデントのHugh Forestが挨拶に現れ、文化庁支援により本視察が行われ、SXSWと日本(関西)との連携が検討されていることを伝えることができた。JETROのLAおよびHOUSTONスタッフの視察が行われていて、情報共有をすることができた。

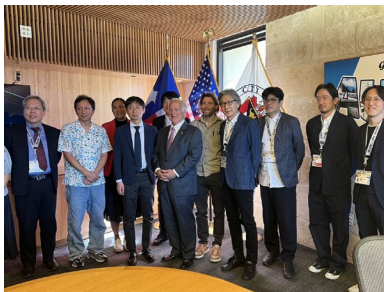


オースティン市長との面談：現オースティン市長のKirk Watson氏との面会の機会を得ることができ、30分強の時間、非常に有益なお話を伺うことができた。

地元のコミュニティ、自治体、イベント主催者との理想的な関係を体感できた。SXSWが地元のミュージシャンの支援を目的として発生し、その後どのように発展をしての現在の在り方となっているのか。自然発生的に発生した地域発展に必要なニーズに合わせて、そういった新たなものを柔軟に取り入れていく姿勢と意識を持つことで、現在オースティン及びSXSWがテック分野で台頭する現在の流れができていているということを学ぶことができ、日本版モデルの構築の検討にあたっては非常に参考になる話であった。

市長との面会後には、市の経済担当とSXSWのパートナーシップ担当のPeter Lewisとの具体的な意見交換、連携の可能性も話すことができた。

特にSXSWの運営面での意見交換は、地域社会とイベントの関わり方を考える上で、ボランティアスタッフの協力や、それに対する考え方など、参考になるものであった。イベントが地域を巻き込むものである以上、地元の自治体、行政、ビジネス、メディア、そして市民の協力なしでは実施することはできないということを改めて認識させられるものだったが、地元市民も企業もSXSWに対して非常に割り切った考えを持っているということを教わり、これは30年の歴史を通して作り上げてきた市という行政も含めて作り上げてきた信頼の実績があるが故のものだということを実感するものであった。



○まとめ：カンファレンスと展示ブースと音楽ショーケース（と映画上映）というSXSWの特徴を体感する視察となった。

オースティン市長との面談を通じて自治体との太い絆を確認することができた。交通確保や安全面など基本的なインフラでもイベントを意識したサポートを行政が行っている。ベースに長期に渡る情報共有と信頼関係醸造があることがわかった。

SXSWプレジデントのHugh Forest氏やパートナーシップ担当のPeter Lewis氏との意見交換も有益で、50年超の歴史を重ねながら、「面白い人を応援する」というSXSWの基本思想を忘れずに、商業主義に傾きすぎず、「旬なトピックを考える勉強会」「面白いことをやりたい人の出逢いの場」という2つの本質を貫くことを重視しているのがよくわかった。

【視察を通じて得たインサイト】

SXSWが30年を超えて、長く継続し、経済的にも文化的波及という意味でも、大きく成長していることを体感し、関係者からヒアリングすることができた。「クリエイティブ関西」の構築に参考になると思われるインサイトは以下の通り。

・アンチ権威（東京一極集中）の思想：

SXSW（サウス・バイ・サウスウエスト）とイベントタイトルが創設時に音楽ビジネスの中心だったニューヨークから南南西にあるということにつけられたように、オースティンに人を集めるという意図はあるが、同時に、アンチワシントン、アンチハリウッド、アンチシリコンバレーという、テキサスという独立国だった歴史を持つ反骨精神が、イベントの個性を育んだと思われ、関西地域との共通点を感じられる。

・ローカルリソース、産業界との連携の蓄積と自治体による環境整備：

テキサス州立大学や、地元大手IT企業の目指す方向性を、カンファレンス内容などに取り込み、掘り上げ、蓄積していったことが、一過性のイベントの終わらずに影響力が増加していた理由と思われる。「未来へのニーズ」に答えるのが、この種のイベントの役割であろう。自治体との継続的なコミュニケーションと、快適なイベント環境の整備も見逃せないポイントであった。

・スタートアップ、クリエイターなど、新規人材への支援：

音楽から始まり、フィルム、インタラクティブと、（高い視座で見た時の）周辺領域をいち早く取り入れたことがSXSWの成長の理由だ。スタートアップやクリエイター、新たな人材を応援していく姿勢も重要で、「オモロイ人」を支援していくことの価値が感じられた。

・整然としない渾然一体とすることで生まれるパワー：

期間中にオースティンの街にいと、大きなエネルギーを感じるとともに、何が行われているかわからない雑然さがある。世界中から様々な分野の人が集まり、同時多発的に様々なことが行われていることが、得体のしれないパワーにつながる。多様な歴史と文化を持つ地域で「クリエイティブ関西」は、様々な街の個性を活かした多様性が武器になると考える。無理にわかりやすくまとめるのではなく、カオスをそのまま活かす発想が必要かもしれない。従来のカテゴリーにとらわれず、音楽とアート、テクノロジーをかけ合わせる事が重要だろう。

・音楽家や起業家など個人（のパワー）へのリスペクトと啓蒙効果：

SXSWには、個人単位で意思を持って集まっている。音楽家も起業家も自立の精神を前提としている。業界単位ではなく、個人単位でイベントを構成、支援していく必要があるだろう。個人へのリスペクトを前提にしつつ、日本の音楽家や起業家にSXSWの思想を啓蒙することには文化と産業の掛け算につながる。SXSWの思想を日本に導入する価値であろう。

・テクノロジーやスタートアップ、地元研究機関、教育機関との連携：

関西には、有名大学、研究機関、テクノロジー企業が多数存在する。それらを世界各地とつなぐハブになっていくことが一番の価値ではないか。